

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	①多様な親子の居場所として、誰もが居心地の良さを感じるような雰囲気づくりをしていく。 ②父同士の交流や支え合いを目的に、パパスクールを継続して取り組む。 ③利用者のニーズを吸い上げる方法を工夫する。 ④今後も、継続して生活習慣を整える必要性など、子どもの育ちに必要のことを伝えていく。 ⑤緊急時の対応についての書面はあるが、実際に機能するための取り組みや日常的に事故や災害を意識して行動できるような取り組みをしていく。 ⑥利用者とボランティアの協力を積極的に受け入れ、コーディネートできるような体制づくりをしていく。	A	B
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	B
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A
評価の理由(法人)			
<p>(主なデータ)</p> <p>【実績統計】 一日平均利用者数:H29年度:子ども50.7人、大人47.1人 母子以外の年間利用者数:H29年度 妊婦8人、父親674人、祖父母140人 利用者の年齢層の割合:H29年度 0歳29.9%、1歳36.7%、2歳19.1%、3歳9.3%</p> <p>【H28年度拠点利用者アンケート(注1)】「拠点での交流を通して子育ての悩みや孤立感が減った」:96% 「地域を身近に感じたり地域の人と知り合える機会が増えた」:92%</p>			
<p>1【利用者を温かく迎え入れる工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> 初めて利用する親子が会話の輪に入れるように、同じ月齢・地域など、共通点のある方をつなぐパイプ役となった。孤立しないよう親子への声かけを積極的に行うことで、安心感を得られるように配慮した。 利用者に参加してもらいながら、季節ごとに壁面の装飾を変える工夫をし、拠点に入りやすい雰囲気づくりをしている。 子ども達が興味を持つような遊具、特に大型遊具を配置することで、その場で遊びが展開され、子ども同士、親同士、ボランティアとも交流が生まれるようにしている。 利用者が「見守りボランティア(注2)」と交流することで、様々な世代の人と接する機会となった。 「赤ちゃんサロン(注3)」や「初めてのひなたぼっこ」を企画し、新たな利用者が安心して来所できるためのきっかけ作りをした。 			
<p>2【多様な養育者が安心して過ごせる場】</p> <ul style="list-style-type: none"> 外国籍の方には、同郷者を紹介し、障害児・祖父母などには、孤立しないよう意識的にスタッフが寄り添い、サポートしている。 「双子ちゃん三つ子ちゃん集まれ」、「プレパパ・プレママ講座」、「テーマ別・年代別のおしゃべり会」など対象者を絞った企画を取り入れ、共通の話題や悩みを話しやすいように工夫をしている。 父親を対象に「ダンボールで遊ぼう」や「パパと遠足」を企画し、父親同士の交流を深める機会を提供した。また、父親同士が声をかけあい、初めての利用者も話しやすい雰囲気となっている。 			
<p>3【ニーズの把握】</p> <ul style="list-style-type: none"> 常に利用者に寄り添う事で話しやすい関係を築き、会話の中からニーズを把握している。 プログラム実施後に利用者アンケートを取り、ニーズを把握している。利用者の声はスタッフ会議で共有し、居場所運営や講座に反映させている。 「拠点が遠い」、「近くにあれば利用したい」等、利用者や地域の子育て支援施設のスタッフなどから把握した声を受け、「出張ひろば」の事業をスタートした。 「公園に行っても他の親子がいない」、「遊び方がわからない」等、利用者や自治会などから把握した声を受け、「公園遊び」の事業をスタートした。多くの親子が公園に集まり、外遊びが必要な年代の親子や拠点には来ていなかった親子とのつながりができた。 母同士の情報交換ができるよう情報ボードを設置し、つぶやきノートを作成した。 子どもが集団の場に馴染めないと感じる保護者の声から、新たな居場所を設置した。 			
<p>4【親子共に育つ場】</p> <ul style="list-style-type: none"> 大型遊具や大小のレゴブロック等、年齢、月齢に合わせた遊具を提供し、利用者や子どもが自分で片付けられるように、写真を貼る工夫をしている。 おもちゃの取り合いなどの場面では、すぐに親が介入するのではなく、見守ることの大切さを伝えている。 同じ悩みを持つ親同士が情報交換し、相談できるように「眠り」、「食育」、「言葉の発達」、「CARE」(子どもと大人の絆を深めるプログラム)、「トイレトレーニング」などの講座を開催した。 「公園遊び」は遊び方を互いに学び、子ども同士が関わる機会となっている。 			
<p>(注1)H29.3~4 拠点利用者300人を対象に実施 (注2)拠点に訪れた親子を見守るボランティア (注3)生後1~4ヶ月までの乳児と保護者、妊婦が参加するサロン</p>			

様式1-1 地域子育て支援拠点事業評価シート

」

- ①拠点のひろばだけでなく、「公園遊び」、「出張ひろば」に出向き、安全などの環境面や、利用者の状況を確認し、定例会で共有している。
- ②配慮が必要な親子に対する関わり方の工夫について助言をしている。多様な方が拠点を利用できるよう、対象者別のプログラムを拠点とともに企画検討し、周知に協力している(赤ちゃんサロン、はじめてのひなたぼっこ等)
- ③利用者の声を定例会で共有し、新たな事業の企画に協力した。
- ④同じ悩みを持つ親同士の育児講座の企画について助言した。また、保健師も講師として携わった。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・利用者を温かく迎え入れ、交流を促す工夫により、多様な養育者が安心して過ごせる場となった。(H28年度拠点利用者アンケート「拠点での交流を通して、子育ての悩みや孤立感が減った」:96%)
- ・「出張ひろば」や「公園遊び」の事業をスタートしたことで、拠点から遠い地域の養育者に身近な居場所を提供できた。また、近所に友達ができ、地域の人と知り合うきっかけになった。(H28年度拠点利用者アンケート「地域を身近に感じたり地域の人と知り合える機会が増えた」:92%)

(課題)

- ・他機関と連携しながら、障害児や子ども同士の関わりの中で配慮が必要な子が安心して過ごせる場を継続していく。
- ・出産後数か月までの親子の利用と相談が増えており、新たに開始した「赤ちゃんサロン」が好評である。今後は、ニーズに合わせて内容や回数を適宜検討していく必要がある。
- ・小さい子に触れあう機会のないまま出産を迎える妊婦が多いため、ひろばに足を運ぶことで、赤ちゃんに触れあえるような取組が必要である。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区子ども家庭支援課や関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気づき、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	①多様な利用者への対応について、拠点スタッフからアドバイスを受けられるような仕組みを作る。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。	②拠点と区は、必要に応じて関係機関と連携して、利用者を支援していく。	A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)
【実績統計】平均相談数:1期目(H22.4~H26.3):112.7人/月(197.7件/月)
 2期目(H26.4~H30.3):189.4人/月(269.5件/月)
 主な相談内容(H29年度):①子どもの生活習慣 22% ②子どもの発育・発達 19% ③親自身 18%
 ④就園・就学 11% ⑤地域情報 7% ⑥子どもの健康7%

【H28年度拠点利用者アンケート】
 「相談してみてどうだったか?」:楽になった58%、元気が出た22%、問題解決ができた 17%、解決できなかった2%、その他1%

1【相談できる場作りの工夫】

- ・1期目は相談できるスタッフが一部に限られていたが、2期目はひろばに関わるスタッフ全員が相談対応できるように体制を組んだ。また、「定例ひろば部会(注1)」での振り返りやスタッフ研修を行ったことにより、相談の対応スキルも上がった。
- ・プライベートにも配慮し、安心して相談ができる場があることを周知し、気軽に個室での相談を受けられるようにしている。また、ひろば内での相談の際には、他のスタッフが子どもを見るなど配慮している。
- ・傾聴を心がけて相談に対応し、相談者の気持ちに寄り添った。
- ・同じ悩みを持つ当事者同士で話し合いができるようスタッフがつないだ。
- ・スタッフ同士が対応などについて日々振り返りをしている。
- ・相談内容に応じて、子育てサポートシステムや、子育てパートナーにつなぎ、スタッフ間の連携を取っている。
- ・スタッフ間の連携のために、連絡ノートを活用し情報共有を行っている。

2【区や関係機関との連携】

- ・継続支援が必要な子どもについては区役所の保健師と連携し、対応方法の助言をもらっている。
- ・発達や離乳食などの相談ニーズに対応するため、定期的に専門職(臨床心理士、助産師、管理栄養士、保育士)の相談日を設けたり、他の相談機関の情報を提供している。
- ・関係機関とつながった後も、子育てパートナーや保健師と連携しながら、継続的に寄り添い見守っている。

(注1)拠点のひろばスタッフによる月1回の定例会

評価の理由(区)

- ①乳幼児健診や家庭訪問の際に拠点の相談機能について養育者に伝え、利用を促している。
- ②定例会で拠点スタッフの対応について振り返り、助言している。継続支援が必要な子どもは、拠点と連携しながら対応している。

拠点事業としての成果と課題

(成果)
 ・スタッフ全員が、相談対応できるように体制を組み、また対応スキルも上がったため、誰もが気軽に相談できる場となった。(H28年度拠点利用者アンケート「相談してみてどうだったか?」:楽になった58%、元気が出た22%、問題解決ができた17%)
 ・専門的な支援が必要な場合は、子育てパートナーと連携を取り、区や関係機関につなげている。その後も、ひろばで声かけをするなど、継続して見守っている。

(課題)
 ・多様な背景を持つ来所者、複雑な相談が増えてきているため、様々な内容の研修を開催し、スタッフが幅広く対応できるようにした。更なる全体のスキルアップ向上を目的に、事例検討を実施していく。

振り返りの視点

- ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
- ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
- エ 区こども家庭支援課との連携のもと、各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
- オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、区こども家庭支援課と相談しながら適切に対応しているか。
- カ 関係機関とつながった後も、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	①今後も継続して、情報収集・発信をしていく。又今後は内容の確認作業も合わせて実施していく。 ②利用者のニーズにあった子育て情報を収集し、拠点以外の場所でも情報が入手できるようにしていく。 ③利用者同士が情報交換できるような仕組みを作る。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		A	A
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		B	B
評価の理由(法人)			
<p>(主なデータ)</p> <p>【事業実績】 ひなたぼっこ通信 発行部数:H25年度 3000部、H29年度 3500部 配布先件数:H25年度 260箇所、H29年度 354箇所 配布先:親と子のつどいの広場、地域サロン、保育園、幼稚園、地域ケアプラザ・地区センター等公共施設 等 HP総平均訪問者数 H25年度 1035人/月、H29年度 1516人/月</p> <p>【H28年度区アンケート(注1)】「情報の入手方法」:インターネット・スマホ 88.2% 友人・知人 67.6% 保育園・幼稚園 26.3% 区役所 7.3% 拠点 6.5%</p> <p>【H28年度拠点利用者アンケート】「情報コーナーについて必要な情報は見つかりますか」:そう思う・ややそう思う 96%</p>			
<p>1【子育て情報の集約と提供】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報コーナーのチラシや資料は、地域別、テーマ別に分類して掲示している。また、ファイリングする際は、掲示物と番号を統一し、利用者自身が探しやすいよう工夫している。 ・子どもを見ながらでも手に取りやすいように、赤ちゃんひろばに乳児向けの情報をまとめたファイルを置いている。 ・情報コーナーでは、掲示物の下にマグネット式のブロック(おもちゃ)を設置したことで、子どもを遊ばせながら情報を見られるようにした。 ・日頃の相談内容から、ニーズの高い、保育園、一時預かり、幼稚園、外国籍の利用者向けの情報について、子育てパートナーと連携し、収集、整理した。 ・来所が困難な方のために、ひなたぼっこ通信(以下「通信」)の配布先を増やし、より身近な場所で受け取れるようにした。また、HPで通信や子育て情報を見ることが出来るようにしたり、広報よこはま旭区版(以下「広報」)を利用し、広く情報が行き渡るようにした。 ・区役所を通じて相鉄グループと連携をし、二俣川駅に隣接する商業施設や旭区内PRボックスにリーフレットや通信、チラシを配架できるようになった。 ・こんにちは赤ちゃん訪問員の定例会に参加したことで、訪問員が拠点に来てくれるようになった。訪問員が拠点の情報を詳しく説明できるようになり、その結果、早期から拠点の利用につながるようになった。 <p>2【区民への周知】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通信、広報、区民まつりで、拠点の情報収集・提供の役割を周知している。 <p>3【養育者や担い手との関わり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の子育て支援関係者が、拠点に来訪し、地域や子育てに関する必要な情報を収集するようになった。さらに各地域のサロンや地域の子育て情報を拠点に提供してくれるようになり、協力体制を築いている。 ・子育てパートナーと連携し、サロンのニーズを把握するため、アンケートを実施した。ニーズに合った情報をファイルにまとめ全サロンに届けた。 ・パパスクール修了生からなる「ひなパパ」(注2)が、活動報告の記事を作成したり、父親目線の情報を拠点に提供してくれている。 ・養育者の声をアンケート形式で拾い通信に掲載することで、養育者自身が関わった紙面に興味を持ち、発行部数が増えた。 ・情報ボード(ひなたぼっこトーク)をひろばに設置し、養育者が情報を発信しやすようにした。 <p>(注1)H29.2~3 母子手帳交付時、乳幼児健診、こんにちは赤ちゃん訪問時に、700人を対象に実施 (注2)H25年に横浜市の「パパスクール事業」として実施した「あさひパパスクール」の修了生を中心に活動しているパパサークル。</p>			
評価の理由(区)			
<p>①来所が困難な養育者でも、拠点の子育て支援情報が入手できるよう、赤ちゃん教室、子育て支援者会場、こんにちは赤ちゃん訪問、家庭訪問で通信を配布している。定例会で通信の内容の確認や助言をしている。</p> <p>②母子手帳交付時、転入時、こんにちは赤ちゃん訪問、とことこ(旭区子育てハンドブック)の配布を通じて拠点の情報提供機能について周知している。</p> <p>③養育者やボランティアの通信に関わる取組について定例会で確認している。</p>			

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・拠点の情報収集・提供機能について区民への周知が進み、地域の子育て支援関係者や自治会などから、拠点に情報が届けられるようになった。
- ・情報をわかりやすく整理し、利用者のニーズに合わせて提供できるようになった。(H28年度拠点利用者アンケート「情報コーナーについて必要な情報は見つかりますか」: そう思う・ややそう思う 96%)

(課題)

- ・HPやスマホで入手できる情報の量を増やしていく必要がある。(H28年度区アンケート「情報の入手方法」: インターネット・スマホ 88.2% 友人・知人 67.6% 保育園・幼稚園 26.3% 区役所 7.3% 拠点 6.5%)
- ・養育者自身や担い手が、情報収集や提供の企画に関われるような機会を作り、さらに継続、拡充していく必要がある。

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ さまざまな子育て支援の場に向いて収集した具体的な情報や、関係機関及びネットワークを通じて得た情報を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 拠点の情報収集・提供機能を幅広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	①旭区子育て支援連絡会は、各団体同士の連携を強化し、子育て世代のニーズを踏まえたネットワークづくりに取り組む。	A	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		A	B
評価の理由(法人)			
<p>(主なデータ)</p> <p>【事業実績】 旭区子育て支援連絡会:年3回開催 H29年度 延べ出席者128人 構成団体:民生委員児童委員協議会、主任児童委員連絡会、保健活動推進員会、青少年指導員連絡協議会、 地域ケアプラザコーディネーター連絡会、区社会福祉協議会、保育園、幼稚園</p> <p>【H28年度拠点利用者アンケート】「地域を身近に感じたり、地域のひとと知り合える機会が増えましたか?」:そう思う・ややそう思う92%、そうは思わない8%</p>			
<p>1【地域の子育て支援関係者との連携と課題解決】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「旭区子育て支援連絡会」(注1)を開催し、地域の子育て支援に関する情報や課題を共有している。課題解決に向けて互いのできることを出し合い、「出張ひろば」、「公園遊び」、「食育講座」、「母の健康チェック」等、新たな活動の開始につながっている。 ・拠点のネットワークを生かし、「旭区子育て支援連絡会」の構成メンバーに、幼稚園協会が加わったことで幼稚園との連携も深まり、双方向の情報提供が可能となっている。 ・「地域サロン交流会」(注2)を毎年開催している。この交流会は、担い手にとって情報交換や課題解決の場になっている。地域ケアプラザ、公私立保育園に参加してもらい、サロン運営の協力体制を築いている。 ・「旭区子育てひろば連絡会」(注3)を開催し、各子育てひろばの情報交換を行っている。また、スタッフの相談スキル向上のため、相談内容の検討、施設見学などを行っている。 ・地域ケアプラザのコーディネーター会議や二俣川地区連合町内会の会議に参加し、子育ての現状の共有や情報交換を行っている。 			
<p>2【拠点利用者や拠点ボランティアを地域へつなぐ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拠点スタッフが、利用者に情報を提供するために、地域に出向いて情報収集している。地域サロン、保育園、地域ケアプラザと顔の見える関係ができ、利用者と地域の橋渡しができるようになっている。 ・拠点内のボランティアをネットワークを通じて、地域サロンや地域ケアプラザなどにつないでいる。 			
<p>(注1)区民と関係機関・行政の協働により、子育て支援活動を推進し、安全に安心して子育てができる街づくりを目的としたネットワーク。区と拠点が事務局。</p> <p>(注2)サロン関係者(民生委員児童委員、主任児童委員、保健活動推進員、地域のボランティア)が情報交換や交流することを目的に、拠点主催で年1回実施。</p> <p>(注3)拠点が事務局となり、親と子のつどいの広場(4か所)の運営者が情報交換や交流などを行う会。年4回開催。</p>			
評価の理由(区)			
<p>①「旭区子育て支援連絡会」で、各関係団体の活動の共有や旭区の子育て支援に関わる現状と課題について意見交換をし、連携促進にむけた働きかけを行っている。 「地域サロン交流会」で、サロンの課題を共有し、協力して地域支援を行う方法について考えている。 「旭区子育てひろば連絡会」では、地区担当保健師も出席し、支援状況や課題を共有している。</p> <p>②拠点の取り組みを定例会で確認している。</p>			
拠点事業としての成果と課題			
<p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「旭区子育て支援連絡会」で、課題共有・意見交換を重ね、協力しあうことで、新たな事業が立ち上がった。 ・「地域サロン交流会」や「旭区子育てひろば連絡会」で、ネットワークを活用し、課題解決に向けた情報交換を行うことができています。 ・利用者を地域の子育て支援の場に丁寧につないだ結果、H28年度拠点利用者アンケートでは「地域を身近に感じる」と答えた人の割合が9割を超えた。 ・新しく出来た二俣川地域ケアプラザとの話し合いを重ねることで、地域とともに、子育て支援・障がい児支援・多世代交流等の課題解決に向けた事業をスタートできた。 <p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担い手不足などの課題を解決するため、地域と連携していく必要がある。 ・「旭区子育てひろば連絡会」や「地域サロン交流会」等で出た課題を確認し、スタッフのスキルアップにつながる企画を検討していく必要がある。 			

振り返りの視点

- ア 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、連携促進に取り組んでいるか。
- イ 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。
- ウ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。
- エ 養育者を身近な地域の子育て支援の場につなげているか。
- オ 子育て支援活動に関心のある方を丁寧に受け止め、必要に応じて身近な地域の活動へつないでいるか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	①拠点利用者が将来担い手として活躍できるような仕組みを検討していく。 ②地域のニーズを把握し、どんな人材が必要か再検討し、地域の子育て支援に関わる人材を増やす取り組みをする。 ③今後も支援者向けの研修を充実させ、地域の子育て支援関係者の資質の向上を図る。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		A	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	A
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

【実績統計】H29年度拠点内ボランティア活動者数:ちくちく隊(注1)17人、ふわふわ隊(注2)30人、見守りボランティア15人、通信ボランティア(注3)8人、わくわくしたいママ(注4)25人

H29年度ひなパパ活動メンバー:35人

【H28年拠点利用者アンケート】「ボランティア活動に参加したいか」:そう思う18% ややそう思う51%

(注1) 毎月1回活動。手縫いで「ひろば」で遊ぶおもちゃを作る拠点のボランティアグループ。作品:お誕生日ケーキ、おきあがりこぼし、魚つり等

(注2) 拠点のイベントや地域のイベントで、バルーンアートによる装飾をしたり、バルーンショーを披露する。年1回養成講座を開催。

(注3) 毎月1回活動。通信の発送準備のお手伝い。

(注4) 子育てをしながら特技や資格を活かし、新しい一歩を踏み出そうとしているママたちの集まり。

1 【地域の担い手支援】

- ・「地域サロン交流会」で把握した担い手のニーズを踏まえて、研修及び情報交換を行った。その結果、担い手のスキルアップや不安の軽減につながった。
- ・ネットワークを通じて把握できた地域の子育て支援関係者のニーズに応え、お楽しみ道具や保育者向けの月刊誌など拠点の物品を貸し出し、地域の活動に役立てた。
- ・拠点内のボランティアグループ「ふわふわ隊」を、地域ケアプラザでも活動できるよう結びつけたことで、他の地域ケアプラザや地区センター、町内会に広がり、その関係者も「ふわふわ隊」に登録するなどボランティア獲得につながった。

2 【養育者の地域活動】

- ・パパスクールの修了生の多くが、父親のグループ「ひなパパ」に参加し、パパスクールのスタッフとして活動をサポートしてくれている。初回メンバーも現在まで活動に参加し、父親同士や家族ぐるみで地域の交流を深めている。また、新たなメンバー獲得に向け、先輩パパとしてパパスクールや地域ケアプラザと共催の父親向けのイベントに参加し、「ひなパパ」のPRをしている。
- ・得意分野を活かして何かをしたい人たちを集めて「わくわくしたいママ」を立ち上げた。拠点のお楽しみの時間に特技を披露してもらうことで、「わくわくしたいママ」に参加する人が増えた。
- ・日頃、ひなたぼっこで活動している「わくわくしたいママ」の活動を広げるため、「わくわくmamaフェスタ」を開催した。開催後、出演者同士様々なイベントに声をかけあうなどの交流が深まり、お互いの活動を高め合っている。
- ・「わくわくしたいママ」に参加したことが自信につながり、老人会や地域ケアプラザ、地区センターなどの活動を増やした方もいる。
- ・子どもの幼稚園入園・小学校入学を機に、もともと利用者だった養育者が、「ふわふわ隊」、「通信ボランティア」などのボランティア活動に参加している。

3 【地域全体の雰囲気づくり】

- ・通信に、常にボランティア募集を掲載していることで、ボランティア希望者が増え、活動につながった。見守りボランティアはひろばでの世代間交流を促している。見守りボラ・通信ボラの中には、子育てサポートシステムの提供会員になり活動を始めた方もいる。
- ・プレママ～シニア世代と幅広くの方に、子育ての現状を知ってもらうために、「子育て・孫育て講座」を開催した。
- ・二俣川地区連合町内会の会議に参加し、子育ての現状や、地域で見守ることの大切さを伝えている。

4 【次世代の育成】

- ・「ジュニアボランティア(注1)」、中学生の職業体験、大学生の実習やボランティアを受け入れ、子育ての現状を伝え、乳幼児との触れ合いを通して、養育者の気持ちを学ぶ機会を提供している。
- ・「プレパパママ講座」を土曜日に開催することでプレパパの参加が多く、助産師からパパの役割を伝える機会となっている。出産後のイメージづくりができるよう、講座の中で、拠点に来ている親子と触れあい、出産後のひろば利用につながっている。

(注1) 区内の小学校5、6年生から募集したボランティア。民生委員児童委員とともに福祉施設の訪問や保育園児との交流を行う。

様式1-5 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(区)

- ①「地域サロン交流会」の企画の協力や、区役所からの情報提供(子育て支援者、役所保育士の派遣等)を行った。
- ②定例会でボランティアに関する報告を受け、助言を行っている。
- ③拠点と共に市民の子育て支援の理解を深めるため、区民まつり、広報、地域支え合い連絡会、講座の企画・協力などを通じて、啓発活動を行っている。
- ④母子手帳交付時の面接や両親教室で、妊娠期からの拠点利用を勧めている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・「地域サロン交流会」を毎年開催することで、担い手の活動を長く支えることができている。
- ・利用者が力を発揮できる取組として始めた「わくわくしたいママ」は、通信やHP、広報、口コミにより、拠点利用者だけでなく、地域の子育て支援関係者や幼稚園児・小学生の養育者にも周知することで、「わくわくしたいママ」の登録者が増えた。「わくわくmamaフェスタ」に向けて話し合いの場を持つことで活動者同士の情報交換の場ともなり、地域での活動につながっている。
- ・ふわふわ隊、ちくちく隊など、様々なボランティアグループが、拠点の活動を支えるようになってきており、地域に活動の場を広げている。

(課題)

- ・今後、ボランティア活動に少しでも参加の意思のある方がもっと気軽に参加できるような仕組みを検討する必要がある。(H28年度拠点利用者アンケート「ボランティア活動に参加したいか」: そう思う18% ややそう思う51%)
- ・利用者を、もっとも身近な活動の場である町内会や商店街など、地域へつなぐ取り組みをする必要がある。
- ・中高年世代のボランティアの参加が少ないので、今後もっと増やしていく必要がある。

振り返りの視点

- ア 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- イ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- ウ 新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- エ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- オ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- カ 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。
- キ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- ク 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ケ これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	自己評価(A~D)	
	法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	A	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。	A	B
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。	A	B
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。	B	A
評価の理由(法人)		
<p>(主なデータ)</p> <p>【実績統計】会員数の推移 H26年度末:利用245人、提供67人、両方33人 →H29年度末:利用350人、提供92人、両方46人 利用件数の推移 H26年度1,268件 → H29年度:1,830件 主な利用内容(H29年度):①保育園・幼稚園送迎641件、②学童保育送迎507件、③利用・提供会員宅預かり312件 「子サポサロン」開催実績(H28年度):5会場、延べ参加人数52人(H29年度)会場:ひなたぼっこ、延べ参加人数31人</p> <p>【事業統計】チラシ配布先:地区センター、地域ケアプラザ、コミュニティハウス、スポーツセンター、二俣川連合町内会、 こんにちは赤ちゃん訪問員、主任児童委員、子育て支援者、親と子のつどいの広場、地域サロン、区民まつり等</p> <p>【H28年度拠点利用者アンケート】「子育てサポートシステムを知っているか?」:知っている74%、知らない26%</p> <p>【H28年度区アンケート】「子育てサポートシステムの認知と利用」: 知っており利用している2.3%、知っているが利用していない43.3%、知らない47.5%</p>		
<p>1【周知活動と提供会員獲得の取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育てサポートシステムのチラシと入会説明会の日程表を、拠点のネットワークを通じて、関係機関や地域に配布し多くの区民へ周知した。 ・提供会員拡大に向け、広報で周知し、区民まつりでは入会説明会を開いた。また、旭区の小中学校の保護者向けに、提供会員募集のチラシを配布し始めた。 ・提供会員の予定者研修が区で開催されるのに合わせて、主任児童委員の定例会や拠点のボランティアに呼びかけた結果、会員増につながった。 		
<p>2【養育者のニーズに合った支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひろばスタッフ、子育てパートナー、区役所と連携し、必要に応じて個別説明を行っている。 ・病気や出産で来所が難しい方には、自宅や病院へ訪問し入会説明を行った。 ・親と子のつどいの広場と連携し、拠点から遠い方向けに出張説明会を開催した。 ・気軽に利用する第一歩として、ひろばで「おためし預かり」を実施し、実際の活動につながった。 ・子育て支援拠点と親と子のつどいの広場が実際の預かり場所として利用できるようになった。 		
<p>3【活動の継続】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターが利用会員から依頼内容を丁寧に聞き取り、子どもを預ける不安や疑問を取り除いている。また提供会員にも依頼内容を詳しく伝え、事前打合せにはコーディネーターが同席し、実際の活動がスムーズにできるよう配慮した。 ・コーディネーター後も毎月の活動報告書を確認し、依頼内容と活動内容の相違や、活動上での困り感があった場合は、コーディネーターが提供会員にその都度連絡をとりながら活動をフォローしている。 ・会員向けの交流会では、コーディネーターと会員、会員間で顔の見える関係を築き、活動の継続や地域ぐるみの支え合いの意義について共有する機会を設けた。 ・安心安全な活動を継続して行えるよう、提供会員が実際に困っていることをテーマにした研修(プレチェック、対応の難しい子との関わり方について)を行った。 ・会員拡大と現会員のスキルアップのために「子育て・孫育て講座」を行った。 ・提供会員と利用会員が顔を合わせることに伴った不安の解消や、会員同士の交流を目的に「子サポサロン」を開催している。 		
<p>4【相談対応と情報提供】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用会員から依頼内容を聞きとり、コーディネーターをしていく中で、専門的な対応が必要と思われる利用者については区につないでいる。 ・子育てサポートシステム以外の子育てに関する相談については、必要に応じて子育てパートナーが同席し、病児保育や家事支援、保育園等一時預かり・移動情報センター・学童・子育てタクシーなどの情報提供や相談を行っている。 		
評価の理由(区)		
<p>①こんにちは赤ちゃん訪問員、母子訪問員、主任児童委員、子育て支援者の定例会で、会員募集や子育てサポートシステムの周知の機会を設けた。提供会員の拡大に向けて、広く区民に周知するため、広報で特集記事を組んだ。</p> <p>②母子手帳交付の面接、乳幼児健診、家庭訪問等で必要な方に利用会員について案内をしている。</p> <p>③障害児や医療的ケアが必要な子どもを預かる際に、利用・提供会員から確認する事項や注意点などを、拠点スタッフに助言した。「おためし預かり」や「孫育て講座」、「出張ひろば」での入会説明会開催など、種々の企画のサポートを行った。</p> <p>④専門的な対応に必要な利用者(障害児、医療的ケアが必要な子ども、養育支援家庭等)については、拠点のコーディネーターと連携して関わっている。</p>		

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・会員拡大の取組を行ってきた結果、利用、提供、両方会員数がすべて増加した。
- ・養育者のニーズを捉え、子育て支援拠点や親と子のつどいの広場での「お預かり」が可能となった。
- ・会員交流会や「子サボサロン」を開催したことで、会員同士が顔の見える関係となり、利用件数の増加につながった。
- ・コーディネートを重ねる中で、提供会員との信頼関係ができ、利用会員からの幅広い依頼にきめ細かく対応できるようになった。

(課題)

- ・拠点利用者への子育てサポートシステムの周知は進んでいるが、H28年度区アンケートでは半数近くが子育てサポートシステムを知らないと回答していることから、周知方法の工夫が必要である。
- ・提供会員を増やすために、送迎だけでも提供会員になれることをアピールするなど周知の工夫をしていく必要がある。
- ・現在小・中学校への周知を始めたところであり、今後は学校数を増やしていきたい。
- ・障害児や医療的ケアが必要な子どもなど特別の配慮が必要な利用者の依頼が増える傾向にある中、今後拠点事業としてどのように対応を行っていくべきか検討する必要がある。

振り返りの視点

- ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
- イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
- ウ 養育者に対して、必要時に利用相談しやすく感じられるような周知活動等の工夫をしているか。
- エ 会員が相互の合意のもとに気持ちよく安全に活動できるよう、会員の状況に応じた活動方法の提案や、丁寧なコーディネートができているか。
- オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や会員のフォロー、追加のコーディネート等を行っているか。
- カ 提供・両方会員が活動の意義を感じながら、安心・安全な活動を継続して行えるよう、研修会等の取組がなされているか。
- キ 会員の活動意欲を高めるため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
- ク 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を促進する取組がなされているか。
- ケ 会員間で授受される個人情報会員が適正に取り扱うことが出来るよう、注意喚起や研修等の取組がなされているか。
- コ 援助活動の調整等を通して把握した子育てに関するニーズを、必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- サ 専門的対応が必要と考えられる相談について、こども家庭支援課との連携、連絡体制のもと、適切に対応しているか。
- シ 子育てサポートシステム以外の子育てに関する相談に対して、情報提供等の支援ができているか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	自己評価(A~D)	
	法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民に認知されている。	A	A
②個別相談に応じ、適した選択肢の提示や養育者主体の選択の支援、必要に応じた支援窓口等の案内や仲介を行っている。	A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。	B	B
評価の理由(法人)		
<p>(主なデータ)</p> <p>【H29年度実績統計】 相談件数:月平均45件(内訳:面接74.0%、電話7.4%、出張18.3%) 出張相談:32回 主な相談内容:①子どもの発育22.2%、②就園・就学19.1%、③子どもの生活17.3%、④制度・サービス11.9%、⑤親自身7.4%、</p> <p>【H28年度区アンケート】「子育てパートナーを知っていますか」:認知度23.3%(知っている6.5%、聞いたことがある16.8%)、知らない68.4%「相談したことがない理由」:ほかに相談できる人がいる45.5%、特に相談することがない30.3%、どんな人か知らない9.1%、どんな相談ができるかわからない3%、秘密が守られるか心配3%</p> <p>【H28年度拠点利用者アンケート】「子育てパートナーを知っていますか?」:知っている36%、知らない64% 「相談したことがありますか?」:ある10%、ない90%</p>		
1【区民への周知と相談しやすい仕組みづくり】		
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の子育て支援関係団体(主任児童委員、連合町内会、子育て支援者、こんにちは赤ちゃん訪問員、幼稚園協会園長会、旭区子育て支援連絡会)の会議へ出向き、事業説明や、チラシ・電話相談先カード配布等、多様な方法で周知した。 ・区と協力し広報で利用者支援の特集を組み、地域情報誌(タウンニュース)やケーブルテレビを使って、特に子育て家庭へのPRに努めた。また、区民まつりで電話番号の入ったマグネットを配り、広く区民に周知した。 ・落ち着いた環境で相談できるよう、休館日に予約制での対応を行った。 ・拠点から遠い人でも身近な場所で相談ができるように、「出張ひろば」で、相談対応を行った。 ・ひろばで、養育者に気軽に声をかけ、相談しやすい環境作りを心掛けている。 ・毎月の通信に、出張相談の場所と日時を掲載し、周知している。 		
2【専門相談機能の充実】		
<ul style="list-style-type: none"> ・養育者の就園についての相談ニーズに応えるため、保育・教育コンシェルジュと一緒に区内の全幼稚園を回って情報(障害児の受入・未就園児対象のプレ保育)を収集し、拠点の情報コーナーで利用者に提供した。 ・ひとり親、外国籍、障害児の養育者からの相談を受けて関係機関を調べて紹介した。不安の強い養育者には必要に応じて、先方へ連絡し、同行支援した。 ・関係機関へ案内・紹介した方が再来所した際には、ひろばスタッフと連携して声掛けをし、その後の状況の把握に努めている。 ・ひろばスタッフと毎日振り返りを行い、さらに連絡ノートを活用し、拠点内での役割分担の確認を行っている。複数のスタッフ(専門相談員含む)で対応を検討し、拠点内での対応ルールを確認している。 ・区役所とはタイムリーに連絡を取り、必要時に地区担当保健師と情報共有や支援方針の確認をしている。また月1回の定例会では、丁寧に振り返りを行い、それぞれの役割や支援方針の検討と確認をしている。また、平成30年度より区母子コーディネーターが配置され、話し合いの場を設けている。 ・様々な相談に対応できるように、子育てパートナーが、Wケアに関する研修や、外国人住民・障害児のサポートに関する研修会に参加し、スキルアップを図った。 ・集団の場に馴染めないと感じる子を持つ親子の居場所をケアプラザに設置し、区役所、西部地域療育センター、横浜市体育協会等と一緒にサポートを開始した。 		
3【地域の社会資源とのネットワーク】		
<ul style="list-style-type: none"> ・育児不安の強い養育者や地域とつながりの薄い家庭などが孤立しないよう、地域の子育て支援関係機関(親と子のつどいの広場・子育て支援者会場など)と連携して取り組んでいる。 ・親と子のつどいの広場(4か所)を順番に訪問し、出張相談をおこなっている。 ・顔の見える関係作りを目的に全サロンを訪問し、情報担当と連携して作成した「子育て支援情報ファイル」を配布した。 		
評価の理由(区)		
<p>①毎月の広報で事業の紹介を行っている。赤ちゃん教室、乳幼児健診、母子訪問の場でチラシを配布し、気軽に相談できる場であることを周知した。</p> <p>②区の事業等の最新情報を随時提供している。定例会や電話で専門的な対応が必要な方への関わり方などについて助言した。</p> <p>③複雑な相談内容(母子家庭、貧困、女性相談等)の増加に伴い、区社会福祉士や地域の子育て支援関係者との顔つきができるよう調整した。</p>		

様式1-7 地域子育て支援拠点事業評価シート

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・関係機関への事業説明や、地域の担い手へのチラシ配布等、多様な方法で周知した結果、子育てパートナーの認知が進んでいる。さらに、「出張ひろば」等、拠点外で相談を受ける工夫をしたことで、相談件数が増えた。
- ・障害受容に揺れ動く養育者や、育児不安が強い養育者の気持ちを丁寧に受け止め、関係機関と連携しながら継続的な見守りができるようになった。

(課題)

- ・拠点から離れた地域の相談に対応できるよう、出張ひろば、地域サロン、親と子のつどいの広場等での相談を今後も継続していく。
- ・妊娠期からの支援について区母子コーディネーターとともに検討していく。

振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 常に最新の情報を収集し、提供しやすく整理しているか。
- エ どのような相談に対しても、相手に寄り添い傾聴し、養育者の主体性を尊重した相談対応を行っているか。
- オ 関係機関等への案内・仲介する場合、先方へ事前に連絡するなど、円滑かつ確実に利用できるような支援をしているか。
- カ 関係機関へ案内・仲介した後も、役割分担に応じて継続的な関わりをもっているか。
- キ 相談の対応状況や支援策の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点から振り返りや検討を行っているか。
- ク 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源(インフォーマルを含む)との間で、利用者支援に関連する情報の共有や関係性の強化を図っているか。
- ケ 専門的な対応を要する相談については、内容に応じて速やかに関係機関に案内・仲介する等、適切な対応を行っているか。
- コ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実や、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整や提案につなげているか。